



私の なんとか しなきゃ!

Vol. 57

PROFILE

1985年群馬県出身。タレントとして、バラエティー番組を中心にテレビ出演するほか、映画やミュージカル、モデル、歌手など幅広く活躍。2011年に肺結核の診断を受け、約3カ月間の闘病生活を送る。同年9月には「ストップ結核パートナーシップ日本大使」に任命され、結核の病気や治療について伝えている。

僕が結核と診断されたのは2011年3月のことですが、体調はその半年前から悪かったです。咳が止まらず、周りも心配するほど体調の優れない日が続きました。病院に行きましたが、いつも「風邪」や「咽頭炎」と診断されていました。

そのうち、寒気や頭痛、倦怠感も出てきました。インフルエンザの検査を受けましたが、結果は陰性。体調はおかしいのに、原因が分からない。仕事が忙しく、休むわけにはいかなかったので、無理を押し続けていました。

結核という病名を告げられたのは、「死にそうなくらい辛い」と危機を感じて夜間救急病院に行った時です。初めてレントゲンと痰の検査を勧められました。結果が出ると、深刻な表情の医師に呼びだされたんです。診断結果は「肺結核」。そう言われてもびんとこなかった僕は、病名が分かってむしろほっとしました。

結核と診断されて、そのまま隔離病棟に入院。当初は「3週間くらいで退院できる」と言われていました。多くの薬を飲

まなければならず、副作用から40度の高熱が出て、眠れない日が続くなど、闘病生活は予想以上に辛いものでした。

ようやく退院した時には、入院から約3カ月たっていました。とはいえ、感染の危険がなくなったから退院できただけで、体調が完全に回復した訳ではありません。薬も6カ月間飲み続けました。

入院中、周りの患者さんの中には、僕より軽い症状で入院してきて、先に退院していく人もいました。僕の場合は発症から診断まで時間がかかった分、悪化していたんですね。早期発見の大切さを痛感すると同時に、「あれだけ病院に通っていたのに」と悔しく感じました。医師でも簡単に見抜けない病気だからこそ、自分から「結核ではないか」と聞ける知識を持つことが大事なのだと思います。

2011年9月からは「ストップ結核パートナーシップ日本大使」として、この体験を積極的に伝えています。僕ら若い世代にも結核という病気は無縁じゃない、他人事じゃないと気付いてほしいんです。

日本では、5人に1人が結核菌を持っ

ていると言われています。そういう人が疲れて体調を崩したとき、結核を発症するんです。当時の僕のように仕事が忙しく、食事をおろそかにしている人に言いたい。「頑張ること」と「無理をすること」は違います。体に限界が来る前に、しっかり食事と睡眠を取って、休養してください。

一方、世界では3人に1人が結核に感染していますが、日本と違って治療を受けられない人もいます。みんなで協力して、結核を減らしていく必要があります。

結核は、発症率こそ低くけれども、とても身近な病気です。カラオケや漫画喫茶など、空気の通りが悪く、人が密集する空間では、感染が広がりやすいんです。普段から、そういうことを意識して、自分の体を守ってほしいと思います。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

「なんとかしなきゃ」で

結核は他人事じゃない

タレント JOY

